広報誌

五十鈴の風

第23号

平成19年1月発行
発行：市立伊勢総合病院

安心していただける医療を

年頭のあいさつ・・・・・・・院長　世古口　務
院内各科紹介・・・・・・・・外科
院内トピックス・・・・・・・ボランティアさん募集中
健康メモ・・・・・・・・・・頸動脈狭窄症の治療
栄養管理課だより・・・・・・冬野菜の代表 青菜
検査室通信・・・・・・・・・尿検査について
院内部署シリーズ・・・・・・栄養管理課

「仲良しの兄妹」　福井　淳 氏（伊勢地区医師会カメラクラブ）撮影

市立伊勢総合病院の基本理念		
	患者様の立場より	愛情と責任を持ち、安全で安心していただける医療
	病院機能の立場より	良質かつ高度の医療
	地域医療の立場より	円滑かつ密な機能分担、合理的かつ効率的な医療

年頭の挨拶

院長　世古口　務

新年明けましておめでとうございます。

近年医療を取り巻く環境は非常に厳しくなってきており、全国の病院があえいでおります。深刻化する勤務医不足、看護師不足であります。特に最近１～２年の間の病院に勤務する医師の減少は大きな社会問題となってきております。新臨床研修制度の発足により、これまで三重県の主な病院の医師補給源であった、三重大学附属病院も極端な医師不足となり、地域の病院の欠員となった医師の新たな補給をすることは不可能となり、いろいろな手段を用いて全国的に医師募集を行っても困難な状態で、やむなく診療科の縮小にも追い込まれ、日常の診療のみならず、救急医療体制も維持していくことが困難となりつつあります。病院に勤務する医師は医師不足の中であっても、これまでどおりの診療を維持していくため、極度に疲弊し、精神的にも肉体的にも限界となってきており、そのために、近年バーンアウトした中堅勤務医の退職、転勤が増加し、残された病院勤務医師の労働条件のさらなる悪化に拍車をかけております。

このままの状態が続けば、地域の人々に安全、安心していただける医療を提供していくことは非常に難しくなってきております。少なくなった勤務医の労働条件を少しでも緩和していくために、伊勢地区医師会の先生方の全面的な協力を仰ぎ、早急に救急医療体制を根本的に再検討し、地域の方々も私どもの病院のような二次医療機関の役割を今一度認識を新たにしていただいて、受診していただくことが必要と思われます。

すなわち、一次救急は極力、お近くの開業医や休日夜間応急診療所で対応していただき、二次救急のみを輪番体制の病院で対応させていただきます。さらに当院外来を初めて受診される患者さんは、かかりつけ医からの紹介状持参の上、正午までに受け付けをお済ませください。まずはお近くの医療機関を受診していただき対応していただきますことをお願いいたします。

年々減少しつつある勤務医の負担を少しでも軽減し、一日も早く、地域の人々に安全で安心していただける医療が提供できる日が到来することを願っております。なにとぞ地域の皆様方が現在の勤務医の窮状をご理解いただきますようにお願いいたします。

院内各科紹介　外　科

外科とは？

消化器の悪性疾患（食道癌、胃癌、大腸癌、膵癌、胆道癌、肝臓癌など）や乳癌、肺癌を中心に、胆石症や鼠径ヘルニア、虫垂炎、痔疾患などの良性疾患の手術治療を行っています。チームで行う手術治療が中心となるため、一人の患者さんに主治医の他、複数医師がチームを組んで治療にあたっています。

認定医・専門医・指導医

各種医学会が試験制度の上に認定するもので、認定医、さらに専門技術を有する専門医、認定医や専門医を養成する指導医といったものがあり、医療レベルを維持・向上するシステムです。当科でも日本外科学会（指導医３名、専門医４名）、日本消化器外科学会（指導医３名、専門医３名）、日本消化器病学会（指導医２名、専門医３名）、日本肝臓学会（専門医２名）、マンモグラフィー読影認定医などを有するスタッフが多く、専門性の高い医療を実践しています。

当科の特色

悪性腫瘍では、ガイドラインに沿った標準的で、安全な医療を提供するとともに、患者様のQOL向上を重視した機能温存手術（乳房温存手術、直腸癌での肛門括約筋温存手術など）も年々増加傾向にあります。体に優しい腹腔鏡手術も、胆嚢結石症、虫垂炎、早期大腸癌、気胸などの疾患に導入しています。

わたくしたちの目指すものは

忙しい毎日ではありますが、“仕事はきちんと、職場は明るく”を信条に、患者さんにとって何が大切かを一緒に考え、“過不足のない外科治療”を目指し頑張っております。特に外科医は日々、心身の健康に留意し、力を発揮できるよう心がけなければなりません。よい仕事がよいチームで行われるための環境づくりも合わせて進めて行きたいと考えています。

スタッフ：世古口務（院長）・山崎芳生（医長）・伊藤史人（医長）・井戸政佳（医長）
湯淺浩行（医長）・大倉康生（医員）・大杉育子（医員）

院内トピックス　ボランティアさん募集中

平成10年１月から、地域に開かれた病院、地域に支えられた病院作りの一翼を担っていただく目的で、ボランティアの方に活動を開始していただきました。

平成18年12月現在で登録人数は11名となっています。
主な活動内容をご紹介します。ボランティアの方にはご自身に合った活動を選択していただきます。

1. 車椅子患者さんの介助・搬送
2. 外来診療科等への案内
3. 車椅子の整備・点検
4. 院内の生け花、折り紙
5. 月４回程度の病棟患者さんへの巡回図書貸出

車椅子患者さんの介助

このうち、一番人手を必要とするのは車椅子患者さんの支援ですが、月曜日から金曜日の朝９時から14時までを二班に分け、２、３名が一組となって活動していただければと思います。
患者さんと職員間の風通しの役目としてもその存在は大きいと考えています。是非とも、更なる地域とのつながり、病院の発展に力をお貸しください。よろしくお願いします。

（医療事務課・川面）

巡回図書貸出

健康メモ

頚動脈狭窄症に対するステント留置術

近年生活習慣や食生活の変化などにより脳梗塞を起こす患者さんが増えてきており、その原因の一つに頚動脈狭窄症という病気があります。これは脳へ続く血管の首の部分（頚動脈）にコレステロールなどがたまってしまい、血管を細くしてしまう病気です。程度が軽いうちは何の症状も出ませんが、重くなってくると脳へ流れる血液の量が減ってしまったり、コレステロールの一部が脳の血管へ飛んでいってしまい脳梗塞を起こします。その結果、手足の麻痺や呂律不全、意識障害などをきたします。

この様な事態を未然に防ぐために頚動脈で血液が流れやすくしてやる必要があります。そのためには頚動脈内膜剥離術という首にメスを入れる手術が行われてきました。しかし最近ステントと呼ばれる筒を使って、細くなってしまった血管を中から広げるステント留置術という治療が行われるようになってきました。

それぞれ長所短所があるのですが、ステント留置術では体にメスを入れることなく、基本的に局所麻酔で行うことができます。よって体への負担は少なく、高齢の方、心臓病や糖尿病などを患っている方にも行うことができ、また入院期間も短くなります。
ステント留置術はまだ歴史が浅いためどこでもできる治療ではありませんが、当科ではこれを積極的に行っております。ぜひお問い合わせ下さい。

（脳神経外科医長　山本章貴）

栄養管理課だより

冬野菜の代表　青菜

冬が旬の青菜はおいしさが増し、栄養価も高まります。いつものメニューにプラス１品で、野菜不足を解消しましょう。代表的な青菜の特徴を紹介します。

『ほうれん草』

1年中出まわりますが、霜に当たったものが肉厚で美味とされています。カロテン（カロチン）、鉄、カリウム、葉酸などを含み、冬はビタミンCが通常の３倍に高まります。
（お浸し、卵とじ、スープなどでどうぞ）

『小松菜』

栄養的にはほうれん草と似ており、多くの栄養素をまんべんなく含みます。特に、カルシウムや鉄、ビタミンKが多いです。アクが少ないので、下ゆでせずにそのまま調理することもできます。
（炒め物、和え物、スープなどでどうぞ）

『春　菊』

キク科に属し、特有の香りがあります。青菜の中で最もカロテン（カロチン）が多く、カリウムやカルシウム、ビタミンKを多く含みます。
（鍋物、和え物、葉先はサラダに向きます）

『水　菜』

古くから京都で栽培され、京菜の別名を持ちます。特にカルシウムとビタミンCが豊富です。全体に張りがあるものが良品とされています。
（鍋物、炒め物、サラダなどでどうぞ）

検査室通信

尿検査について

∞∞∞尿は健康のメッセンジャー∞∞∞

私たちが普段、排泄している尿は、実は健康状態を知るための鍵になっています。

体の調子が悪ければ、尿にも変化がみられます。例えば、血が混じったり（血尿）、ニオイがいつもと違ったり（細菌尿）します。尿をするときに痛みを感じることもあります。

尿検査は、尿中の細胞、たんぱく、糖などを調べ、体の基本情報をさぐる検査です。尿がつくられている腎臓の機能はもちろん、膀胱・前立腺等の病気を発見するのにも役立ちます。

時々、自分の尿を観察してみましょう！

尿の異変に気が付いても、なかなか人には相談しにくいかもしれません。しかし、体のSOSを見逃さないためにも、おかしいな？と思ったら、一度かかりつけ医を受診してみましょう。

院内部署シリーズ

今回は 栄養管理課です。

栄養管理課では調理師５人、調理員１８人、管理栄養士６人、事務員１人の計３０人が従事しており、

❶入院患者さんの食事作り
❷入院および外来患者さんへの栄養食事相談
❸入院患者さんの栄養管理等を行っています。

❶入院生活の中で、多くの患者さんは食事の時間を楽しみにされています。その期待にお応えするため、職員は、温かくておいしい食事作りに励んでいます。また、季節の行事食や毎月１回のお菓子、誕生祝い等にも取り組んでいます。

最近では、食事がますます多様化し、１回に５０種類以上の食事に加え、飲み込みが悪くなった患者さんにやさしい食事（きざみ食やミキサー食）が必要とされ、こうした需要にも可能な限り対応しています。

❷糖尿病や腎臓病、心臓病、肝臓病などの治療には、食事療法が必要です。主治医から依頼があれば、相談時間を予約していただいた上で、食事のとり方を説明し、「食事の自己管理」のお手伝いをさせていただいています。

❸管理栄養士が病棟に出向き、他の職種と協働して患者さんの栄養状態の改善に取り組んでいます。栄養状態の良否は、患者さんの治癒力や合併症の予防に影響するため、食事摂取量が不足して栄養状態が悪い場合は、栄養補給法を検討します。

これからも、お食事を楽しみにしていただけるよう努めてまいります。